第6回国際所得国富学会の印象

大　川　一　司

国際所得国富学会(The International Association for Research in Income and Wealth)の第6回の会議が1959年8月23日から9月1日までユーゴスラビアのポルトロッツ(イタリア国境のトリエステにほど近い海辺の村)で持たれた。参加者百人余。今回の議題は末尾に掲げるように4つであった。(1)デフレーションの問題,(2)金融勘定ないしマネー・フローの問題,(3)長期的経済成長の計測の問題，そして(4)いわゆるイースタン・アカウンティング(ソ連および東欧諸国のソーシャル・アカウンティング)。そうして経済成長について2日間，その他は1日づつのセッションを持った。

今度ユーゴースラビアでこの会議が開催されたのはイースタン・アカウンティングの問題を議するためであった。したがって，このテーマが今年の特殊の関心であったことはいうまでもない。セッションの持たれた順序にしたがって印象を述べよう。

I　経済成長

経済成長の問題については十数の論文が提出された。報告の重点はいろいろであって全体としての成長に主眼をおくもの，産業別の成長に主題をもつもの，これと関連して交易条件を問題とするものおよび貿易の発展に限定されたもの，さらに所得分布(シェアーおよびサイズ)あるいは固定資本の変化を取扱おうとしたもの等にわたる。これらはすべて長期の経済成長のメカニズムを問題としている点で共通テーマとして取扱われた。

いうまでもなく「経済の長期的成長の計測」は戦后クズネッツを中心とする努力によって目ざましく進展してきている。第2回の会議以来，その結果は各回を通じて報告されてきたが，今回はそれが最も集中的に行われたとみられる。私としての印象では，これらの諸論文のすべてが当面したはずである推計過程の困難をそれぞれどのようにして解決してきたかということをもっと検討しなければならないと思った。このことは今后における論文内容の詳細な検討と個人的接触等にゆだねられているけれども，しかし長期推計の結果が一応これだけ出揃ったのであるから，これまでの分もあわせて考えてみれば成長に関するこのいわば国際的な「共同研究」は，まとめて国際比較をして総合することがかなりの程度に可能になったという意味で1つの時期を画するにいたったという印象をもった。

議長クズネッツはこれらの論文の討論の仕方について1つの注文をつけた。それは計測の方法自体についてよりも，その計測結果の分析ないし解釈についてである。すなわち，(i)これらの諸国の資本主義的発展の初期における状態と，今日の後進諸国の経済発展の問題との間に比較を行うように留意したいということ，(ii)これら諸国の長期にわたる成長率について何らかのタイム・パターンが規定できるかどうかという点に留意すること，(iii)産業構造の長期的な変化ならびに産業別の生産性の相違とその変化(たとえば農業の生産性の低位とその動向)に注目すること，(iv)資本形成の仕方ならびにできれば資本係数の大きさおよびその変化を問題としたいこと，(v)消費のパータンの長期的な推移を追求したいこと等である。討論は大体において議長のこうした要望にそうように努力して運ばれたと思う。

デスカッションの過程でとくに印象に残った1,2の点は次のようである。(i)　これらの先進諸国の初期における経験の分析を今日の後進国の問題理解に役立てようという視点はあまりみのり多いものではなさそうである。経済成長を規定している諸条件にそうとう大きな相違があるという反省が必要ではなかろうか。(ii)　いわゆるtake off periodの規定の可否をめぐる論議はタイム・パータンを規定する問題のうち最も関心のもたれるものだが，これについて否定的な見解をもつクズネッツの問題の提出にたいしては今後の研究を約すべきものと思う。(iii)　資本形成ないし資本係数に関係して工業化の初期において特に資本節約的投資が行われたはずであるという仮説が提出された向があるが，この点の実証が行われることが今後の重要な課題の1つであろう。(iv)　この種の成長問題についてクロス・セクション・データがどの程度役立ちうるかという点の論議については可否両論が対立したが，私は以下に述べる理由から今日のところタイム・シリーズに限定して諸研究結果を比較検討すべきであろうという見解をもった。

日本の成長研究については今回は報告をしなかったが，現在進行中のその後の研究結果は，1960年香港でもたれるこの学会の地域会議で報告する約束のもとにある。

II　金融勘定

Bjerve 議長はこのセッションを3つの部分にわけた。中心部分は Denizet, Dorrance, Sowyer 等の諸氏の報告であってこれは主としてこの種のアカウンティングをいかに発展せしめるかという固有の問題についてであった。その前座は私が倉林君の日本に関する論文をプレゼントし中心部分の討論のあとで，Davies 氏の報告をめぐる質疑応答をもった。Davies 氏の報告は欧州におけるこの問題に関する統計家会議が貯蓄の推計という実際的な問題に発して今日まで展開してきた研究過程をまとめたもので，Dorrance の各国の金融勘定の現状に関するペーパーとともにきわめて有益なインフォーメーションを与えたように思う。

周知のように，この分野は国民所得勘定の場合と異なって，最近とくに急激に発達しているもので，それだけに標準的な方式を確立する方向への努力，また他の勘定とくに国民所得勘定とのインテグレーションの問題等，いわば極めて動いているテーマである。したがってこの勘定を使って現実の経済を分析するという問題の提出の仕方は倉林君の場合を除いてみられなかったのは当然であるといえよう。1959 年1月にアメリカで開かれる所得国富学会がこの金融勘定の問題を主テーマとして取上げたことは時期を得ているのであって，今度のセッションはなお今後の研究の前段階を画するという感が強かった。

日本のことについて一言を費すならば，スタートしたばかりの2つの勘定(経済企画庁研究所と日本銀行)はそれぞれ特徴をもっているが，最も発達したアメリカやカナダの場合は別としてもドイツやフランスの程度にこれを整備する努力が目下の急務であろう。そういう意味で1つの視点は国民所得計算の拡充という点につらねてこれを拡充するという問題がこのセッションの討論を通じて私がもった企画であった。

III　デフレーション

デフレーションに関するセッションは Geary によって司会された。Bjerke のデンマークに関する報告はその題目が示すように厚生指数等をふくむ政策適用的問題であって，これをめぐる論議は活発であったが得るところは少なかったように思う。このセッションの中心の課題は生産性の変化のエフェクト，それから国際貿易勘定についてのいわば，デフレーション・エフェクト，この2つをめぐる問題であった。Beaner が代ってプレゼントした Flexner の論文などはきわめて理論的集約的にこの中心課題を取扱い，デフレーション・エフェクトについて1つの提案を行ったものであり，また議長 Geary 自身もコンスタント・プライスにおける国民所得勘定について，特に貿易差額に関するデフレーション・エフェクトの取扱いに関しきわめて具体的な提案を行った。のみならず，彼はかなり熱心にこの種の提案の支持を参加者に求める向があった。このことは彼が国連の国民所得部長という地位にあるだけに注目された。国民所得勘定をコンスタント・プライスにおいて標準化していくという問題の定義はたしかに必要なことであると私も考えるが，しかし，デフレーションの問題はかなり便宜的前提をおかざるを得ない性質のものであるだけに難しい点があると思われる。

周知のように，国民所得ならびにその類似概念およびその構成項目の実質化という課題は決して新しいものではない。古くは1人当り国民所得が厚生の指標として用いられるという点から問題となった。そうしてそれは困難な指数論の問題にまで発展したのである。今日国民所得等の時系列の比較のために各国の政府は次第にその実質額系列を公式に発表するようになってきている。これはこれらの系列が経済活動の指標として分析目的に用いられる視点がきわめて強まったからにほかならない。日本の現実の問題をこの分野について考えてみるとこのセッションでは殆んど取上られなかった初期的なデフレーションの問題，つまりアグレゲート的にではなく項目別により正確にデフレートをするという問題さへ不十分にしか解決されていないという点が私にはとくに反省させられた。

IV　イースタン・アカウンティング

ソ連をはじめ東欧諸国からの参加者が予期に反してきわめて少なかったことはこのセッションに最も期待した私にとって遺憾であった。しかし，ユーゴスラビアの多くの研究者を通じまた Kaser の報告の場合にみられたように，国際機関のスタッフの調査を通じて社会主義諸国における問題点とその推移をかなりの程度に知りえたことは有益であった。このようないわば情報的効果とともにいわゆる社会生産物の集計に関して対立する基本的，理論的概念の相違に関する報告と討論もまた行なわれたことはわれわれに十分の関心をもたせた。

前者の情報的効果について私として新知識であったのは次の点である。すなわち，社会主義国家の間においてもいわゆる非生産的労働と生産的労働との区別を実際の社会勘定において行なう場合には，必ずしも見解が一致していないという点であり，さらに，その統一性と比較可能性をはかるためにワルソー会議等の専門家の集りがもたれてきているということであった。後者の概念規定の問題についてはユーゴースラビアの Horvat の報告をめぐる討論が最も活発であった。彼はマルクスが『資本

論』に展開した生産的，非生産的という規定を国民所得勘定にそのまま適用することは誤りであるという基本態度から出発している。これにたいする反論が殆んど展開されなかったのは論議がつくされないという意味において残念であったが，他方において彼はアメリカないし国連方式，クズネッツ方式(政府サービスに関する概念が前者と異なる点)およびソ連方式の比較検討を展開したのは討論を誘発するに有益であった。

資本財に関するデプリシェーション概念は周知のように国民所得勘定体系において大いに問題になる点であるが，これに対して Horvat はリプレイスメント概念を主張し大いに論議を呼びおこした。Ortherber の報告ともあわせてわれわれは社会勘定における東西間の問題の所在を反省する機会を少なくとも与えられた。

私の個人的なかつ具体的な印象はとくに国際間の比較可能性の問題に傾いた。概念，勘定方式の相違は多かれ少なかれ西側の内部においてもまた東側の内部にも今日存在するのが事実であるとすれば，そしてさらに，東西間に基本的な相違が持続することを是認しなければならないとすれば，諸国家間に比較可能性をいかようにして樹立するかという技術的な問題を解決することが緊要な課題であると思われた。この点についてはすでに国連方式によるソ連国民所得の評価とか，アメリカ方式ならびにソ連方式によるユーゴースラビア国民所得の概算とかいった試みがなされることによってスタートがきられているようである。成長率論争が今後も盛んになることを思えばこうした線に沿った比較可能性の拡充がタイム・シリーズにまで及ぶことが望ましいように思われる。

以上きわめて個人的印象を中心に4つのセッションについて簡単な紹介の文を綴ったが，最後に1つの点を附加しておきたい。それは，その会議がすぐれて欧米的な性格をもたざるを得ないことになっている点である。今回はとくにそうであったが，アジアからの参加者は近東からの数名と極東から私1人という実状であった。後進地域における所得国富に関する研究の関心の視点がかなり異なるものをもつことはいうまでもない。この点についてこの学会はすでに，ラテン・アメリカで地域会議をもち，さらにアフリカならびにアジアに関しての地域会議をもつ企画をもっていることはきわめて喜ばしいことである。1960 年8月に香港で開催されるはずになっているアジアの地域会議では，この地域の問題に即したプログラムが作られ，かつこの分野における日本の諸研究が十分に発表消化されることが望ましい。長期成長の計測と分析，マネー・フロー勘定，4半期別国民所得を主たるデータとする計量モデル分析，資本係数に関する諸問題等は新らたに選出された議長 Saunder 氏ならびに事務局諸氏と私との間で相談した際，日本から提出を望まれる論文のテーマとしてのぼったものである。私自身としてはこれらに加えてもっと地道な推計の問題等もアジア地域では重要であると思っているが，読者の参考のためにこのことを記しておく。

PAPERS PREPARED FOR THE 1959 (PORTOROZ) CONFERENCE OF THE INTERNATIONAL ASSOCIATION FOR RESEARCH IN INCOME AND WEALTH

I. PROBLEMS IN THE DEFLATION OF NATIONAL ACCOUNTS

Sessions organised by R. C. Geary

K. Bjerke : Some reflections on price indexes, welfare indexes and wage adjustments.

R. W. Burge : Deflation within an accounting framework with reference to actual country data.

W. W. Flexner : An analysis of the nature of aggregates at constant prices.

S. Fabricant : Notes on the deflation of national accounts.

R. C. Geary : Some observations on national accounts deflation, with special reference to productivity.

J. L. Nicholson : The effects of international trade on the measurement of real national income.

II. FINANCIAL ACCOUNTS OR FLOW OF FUNDS STUDIES

Sessions organised by P. J. Bjerve

B. Davies : The Work of the Conference of European Statisticians in the field of national financial accounts.

J. Denizet : Les problèmes techniques posées par l'établissement des comptes d'opérations financières.

〃 : Technical problems raised by the establishment of accounts of financial operations.

G. S. Dorrance : The present status of financial accounts : a review of recent developments.

J. A. Sawyer and F. W. Emmerson : Estimates of saving prepared from financial transactions accounts in Canada.

Y. Kurabayashi : The flow of funds study in the Bank of Japan : its implications for the analysis of the recent monetary situation in Japan.

III. ECONOMIC GROWTH

Sessions organised by Simon Kuznets.

H. B. Bos : Economic growth of the Netherlands : a summary of findings.

Juul Bjerke : Some aspects of the long-term economic growth of Norway since 1865.

Phyllis Deane and W. A. Cole : The long-term growth of the United Kingdom 1688—1950 : a summary of findings.

W. G. Hoffmann : Growth and structure of consumption and savings in Germany, 1851—1913.

Osten Johansson : Economic structure and economic growth in Sweden 1861—1955.

Karl G. Jungenfelt : The share of wages and salaries in national income in Sweden, 1870—1955.

J. Marczewski : Some aspects of the long-term economic growth of France since the end of the eighteenth century.

T. J. Markovitch : Le produit de l'industrie française au XIXe siècle.

J. H. Muller : Trends in the distribution of income by size in Germany 1873—1913.

〃 Addendum to the above.

A. Ølgaard : Long-term trends in prices and in internal and external terms of trade in Denmark, 1875—1955.

〃 A summary of the above.

Bo Sodersten : A survey of the structural development of Sweden's exports and imports since 1870.

J. C. Toutain : Le produit de l'agriculture française 1815—1938.

〃 Le produit de l'agriculture française au XVIIIe siècle.

Ivo. Vinski : National product and fixed assets in the territory of Yugoslavia, 1909—1958.

C. Carbonnelle : Recherches sur l'évolution de la production en Belgique de 1900 à 1957.

J. Marczewski : Résultats provisoires d'une étude sur la croissance de l'économie française 1700—1958.

R. Bicanic : Economic Growth by Economic Sectors.

IV. PROBLEMS OF SOCIAL ACCOUNTING AND NATIONAL BUDGETING IN EASTERN COUNTRIES.

Sessions organised by E. F. Jackson.

Branko Horvat : The conceptual background of social product.

M. Kaser : A survey of the national accounts of Eastern Europe.

Albin Orthaber : Comparisons of the Jugoslav, Soviet and SNA national accounts.

Wolfgang F. Stolper : National accounting in East Germany.

L. Zienkowski : The system of the economic accounts in Poland.

〃 Statistical Balance of the National Economy of the Czechoslovakia.

Bohdan Szulc : Comparaison de la consommation en Pologne et dans la République fédérale allemande.